

世界農業遺産「能登の里山里海」を代表する棚田 「白米の千枚田」

— 石川県輪島市 —

石川県農林水産部農業基盤課 堀田 卓

1. はじめに

「白米の千枚田」(表紙写真, 写真-1)のある輪島市は、石川県の北部、日本海に突き出た能登半島の先端に近い場所に位置している(図-1)。能登半島は標高300~500m程度の山々が連なる低山・丘陵地域であり、輪島市の年間平均降水量は2,162mm、平均気温は13.8℃で、冬期は雪深くなる地域もある。

「白米の千枚田」の「白米」とは輪島市白米町にあることによる。棚田は、能登半島を一周する国道249号と日本海の間のおおきな崖地にあり、世界農業遺産「能登の里山里海」を代表する棚田景観として、多くの観光客が訪れている。



写真-1 夏の「白米の千枚田」(輪島市提供)



図-1 位置図

2. 世界農業遺産の認定国内第1号

「白米の千枚田」をはじめとした能登半島一帯の「能登の里山里海」は、平成23(2011)年6月、国連食糧農業機関(FAO)により、新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」とともに、国内で初めて世界農業遺産に認定された。

「能登の里山里海」の認定は、主に次の点が評価されたものである。

- ① 山の斜面を利用した棚田や谷間を利用した谷地田、能登半島で2,000を超えるため池などがモザイク状に展開され、希少種を含む生きものが生息し、優れた里山景観が保全されている。
- ② 能登の風土を活かして生産され、優れた特長・品質を有する17品目の「能登野菜」や、能登大納言小豆など由来品種の栽培振興が積極的に図られている。
- ③ 天日で稲穂を干す「はぎ干し」や海女漁、日本で唯一能登にのみ残る「揚げ浜式」と呼ばれる製塩法など伝統的農林漁法と技術が継承されている。
- ④ 豊漁や豊作を祈願し、「キリコ」や「奉燈」と呼ばれる御神灯が練り歩く「キリコ祭り」や、田の神に感謝する神事でユネスコの無形文化遺産にも登録された「あえのこと」など、農耕にまつわる祭礼が継承されている。

令和3(2021)年11月には、認定から10年の節目を記念し、「世界農業遺産国際会議2021」が石川県七尾市にて開催され、あらためて認定地域としての価値やこれまでの取り組みが各地に発信されたところである。

3. 「白米の千枚田」の概要と歴史

「白米の千枚田」は、日本海に面して小さな田が連なって海岸まで続く絶景が今日まで守られており、日本の棚田百選や国指定文化財(名勝)に指定されている。水田1枚当たりの面積は約18m²と非常に小さく、全体で約4haの範囲に1,004枚の棚田が広がっている。

棚田の水面に映る空の青や、夏の稲のみずみずしい緑、眼下に広がる海の青のコントラストは絶景である。秋の収穫期には、棚田は一面黄金色となり、まさに「日本の原風景」とも言うべき景観が広がる。

「白米の千枚田」の歴史は、「加賀百万石の祖」とも称される前田利家が、天正9(1581)年、織田信長より能登一国を与えられ、加賀、能登、越中の3国の大半を領地とした加賀藩の初代藩主となった頃から始まる。利家が開墾令により荒れ地の回復を命じたことで、山間部の千枚田は新開田として、また隠し田として開発され、開発に不可欠な用水路の造成は、江戸時代では最も主要な工事とされていた。

しかし、貞享元(1684)年には大規模な地すべりによって、さらに、享保14(1729)年には地震による山崩れによって、田の大半を失う苦難に直面している。その後荒れ地のままで放置されていたが、明治時代になって、それまで集落の重要産業であった製塩が衰退すると、田の開拓に力を注ぎ、明治時代の前半には現在の形状に近い棚田地帯が形成された。

4. オーナー制度

棚田には大型機械を入れることができないため、^{くわ} 鍬や鎌を使った人力による昔からの農法での米づくりをしている。

昭和50年代に最も耕作放棄が進み、約4割が草地となっていたが、市、JA、民間企業等がボランティアで田を整備し、現在の景観を復活させた。平成18(2006)年には、地元有志によって「白米千枚田愛耕地」が組織され、オーナーを募り始め、平成19(2007)年からは正式に「千枚田オーナー制度」を導入した。年会費を支払いオーナーになると、お気に入りの場所で「マイ田んぼ」を持つことができ、表札が建てられる。稲作作業に参加できるほか、収穫米や地元特産品がもらえ、稲作作業を通じて、地元耕作者と全国のオーナーが交流を深めている(写真-2)。平成19年度に57組でスタートしたオーナー会員の数は年々増え、令和3年度には過去最多の209組となっている。そして、会員の多くが次年度も継続を希望し、その割合は8割を超えている。



写真-2 オーナー制度による田植え(輪島市提供)

5. あぜのきらめき

平成23年からは、「白米の千枚田」をイルミネーションで彩るイベント「輪島・白米千枚田あぜのきらめき」が、毎年秋から冬にかけて開催されており、能登の恒例行事としてすっかり定着している。田んぼのあぜにボランティアによって設置された太陽光発電付きLEDライト(愛称「ペットボトル」)25,000個が、日没から4時間、15分間隔で、ピンク、グリーン、ゴールド、ブルーと色を変えながら棚田を彩る仕組みとなっている。表紙写真にあるように、棚田の幾何学的なあぜ模様が夜の闇に浮かび上がり、幻想的な光の空間を生み出している。

6. 農業農村整備事業と千枚田

「白米の千枚田」がある斜面は、農村振興局が所管する地すべり防止区域となっており、これまで県営の地すべり対策事業によって、集水井や水抜きボーリングなど対策工事が実施されてきた。農業農村整備事業が棚田景観の保全に寄与している。

また、昭和50年代には、県単独事業で農道が整備されているが、能登半島国定公園内であり、景勝地の景観を壊さないよう国道249号から見えにくい場所に設置する工夫がされている。

7. さいごに

全国的に棚田地域では過疎化や高齢化が進んでおり、担い手の確保が課題となっていることから、「棚田地域振興法」が令和元(2019)年に施行され、国の支援策が強化された。今後も各地で振興策が展開されていくことと思われるが、本地域は棚田を核とした地域振興の先進的な事例と言えるのではないだろうか。

「白米の千枚田」は、平地がきわめて少なく、しかも地すべり地帯という厳しい自然環境でありながら、そこに立ち向かって暮らしてきた能登の人々が作り上げた貴重な歴史遺産である。世界農業遺産の認定をきっかけとして、その価値や魅力をこれからも発信し、能登の豊かな里山里海を守っていきたい。

参考文献

- 1) 石川県農林水産部耕地建設課：石川県土地改良史、石川県(1986)
- 2) 「愛蔵版ふるさときらめき館」編集委員会：ふるさときらめき館—石川・富山の文化財—愛蔵版、北國新聞社(2011)
- 3) 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会：世界農業遺産「能登の里山里海」情報ポータル、<http://www.pref.ishikawa.jp/satoyama/noto-giahs/index.html>(参照2021年12月6日)
- 4) 石川県教育委員会文化財課：白米の千枚田(2010)、<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/siseki/2-4.html>(参照2021年12月6日)